第73回四大戦 複数種目で大健闘し 準優勝

バレーボール男子 フルセットの末 優勝

【21日　大学体育館】

一般種目バレーボール男子の試合が行われ、成蹊Ａが優勝した。試合は25点先取の３セットマッチで、最終セットのみ15点先取で勝敗を決める。

《試合結果》
○２－０　対成城Ｂ
○２－０　対学習院Ｂ
○２－１　対学習院Ａ

本学のサーブから始まった成城Ｂ戦。森川皓平選手（現代社会４）のサービスエースから流れを作り、25－12と大差をつけ第１セットを終える。第２セットでも勢いは衰えず、25－12で初戦に勝利した。

準決勝、第１セット中盤に連携プレーが決まらない場面が見られたが、その後はツーアタックやクイックなど巧みな戦術によって、25－19でこのセットを終える。第２セットでは、途中14－14と互いに譲らない展開になるも、終盤に試合の流れをつかみ25－18で勝利。決勝へと駒を進めた。

続く決勝戦。ミスや相手のフェイントに翻弄（ほんろう）され、19－25で第１セットを落とす。しかし第２セットからは、正確なプレーを心掛けた本学の反撃が始まる。江南優寅選手（経済経営４）の左サイドからの強烈なスパイクや、２枚そろえることを意識した手堅いブロックで得点を重ね、25－21で第２セットを制した。勢いに乗った本学は第３セットでも攻守に躍動。15－６と大差で勝利し、念願の優勝を決めた。

試合後、主将の市川英太郎選手（情報科４）は「決勝戦は序盤に多かったミスを減らせたことで、第３セットでは差をつけて勝利できた。来年も優勝してほしい」と期待を寄せた。（佐藤樹）

スパイクを打つ本学選手

卓球男子Ｄ 巧みなプレーで 準優勝

【22日　卓球場】

一般種目卓球男子ダブルスには伊佐次宏祥選手（総合経営３）と伊藤篤史選手（経済経営４）のペアが出場。３ゲーム先取で戦い、準優勝を果たした。

《試合結果》
○３－１　対武蔵
●１－３　対学習院

決勝の学習院戦、本学は第１、２ゲームを立て続けに奪われ窮地に陥る。第３ゲームでは序盤に主導権を握り５－２とするも、逆転され相手にゲームポイントを許す。しかし、伊佐次選手の回転のかかったサーブや伊藤選手の粘り強いショットが光り、土壇場でデュースに持ち込んだ。一進一退の攻防の中、会場の声援もプレーを勢いづけ連続得点。終盤に正確なラケットさばきを見せた本学が12－10で第３ゲームを取った。第４ゲームを落とし試合には敗れたものの、準優勝と奮闘した。

試合後、伊佐次・伊藤ペアは「学習院に負けたのは悔しかった。しかし予選は勝ち上がれたので良かった」とコメントした。（万浪耀）

バスケットボール女子 初戦敗れるも つかみ取った３位

【23日　大学体育館】

一般種目バスケットボール女子の試合が行われた。本学は３位決定戦に勝利し３位。試合は８分間ずつの４ピリオド制で勝敗を決める。

《試合結果》
●29－38　対学習院
○42－27　対武蔵

初戦の学習院戦は大きくリードを許す展開に。第２ピリオドでは長坂百合香選手（政治２）が３ポイントシュートを決め16－23と点差を縮める。続く第３ピリオドでは積極的に攻撃を仕掛けるが、得点に結びつかない。最終ピリオドにはリバウンドシュートで点を重ねるも、29－38で敗北した。

３位決定戦の武蔵戦は、幸先の良いスタートとなる。しかしその後は一進一退の攻防が続き、第３ピリオド終了時には、24－20と４点差まで迫られた。もう後がない第４ピリオド、本学は谷合三知選手（法律３）のレイアップシュートを機に反撃を始める。ラスト２分間は堅守で得点を許さず、さらに相手を突き放した。加藤愛華選手（政治３）の３ポイントシュートで試合は終了。42－27で本学が勝利した。

試合後、主将の丸山絢女選手（政治３）は「普段はメンバー全員で集まることがないので、楽しく試合ができた。今後は後輩に頑張ってもらいたい」と笑みを浮かべた。（掛札若奈）

四大戦得点表

	学習院	成蹊	武蔵	成城
総合成績	優勝 138.25	2位 129	3位 99.5	4位 78.25
正式種目	優勝 81.75	2位 77	3位 59	4位 45.25
一般種目	優勝 56.5	2位 52	3位 40.5	4位 33

四大戦優勝団体一覧

正式種目		一般種目	
弓道男子	バドミントン女子	サッカー	バレーボール女子
硬式庭球女子	バレーボール女子	卓球混合	バレーボール男子
サッカー	バレーボール男子	卓球男子Ｓ	フットサル女子
水泳	ハンドボール	テニス混合	
水球	ラグビー	テニス男子	
漕艇	陸上競技		

サッカー 果敢な攻めで 決勝制す

【21日　北グラウンド】

一般種目サッカーは、成蹊Ｂが決勝戦で学習院Ｂを破り優勝。試合は20分ハーフの計40分で行われた。

《試合結果》
○３－０　対学習院Ａ
○１－０　対武蔵Ｂ
○２－０　対学習院Ｂ

本学は全試合を通し前半から積極的にプレッシャーをかけ、相手に落ち着く余裕を与えない。決勝戦でも開始から安定した試合運びを見せる。一方で相手の堅固な守備を崩し切れず、両チーム拮抗（きっこう）した展開が続く。前半16分、ディフェンスラインを上げていた相手の意表を突き、左ウイングにロングパスが通る。ドリブルからそのままシュートを放つも、下がってきた相手DFに当たり、GKに防がれてしまう。得点を奪えず、前半は０－０に終わった。

後半開始早々、本学はコーナーキックのチャンスを獲得する。森田脩平選手（総合経営３）が左サイドから放ったボールを、ファーサイドにいた長塚十太選手（日本文３）がヘディングで押し込みゴール。本学が待望の先制点を奪った。さらに後半８分、中田大智選手（経済数理１）が右サイドでパスを受けると、持ち前のフィジカルを生かしたドリブルで相手ゴールに迫る。そのままゴールエリア内から豪快なシュートを決め、２－０となった。相手のプレッシャーが強まる中、後半15分には本学がファウルをとられピンチを招く。フリーキックによるセンタリングから相手にシュートを放たれるも、ゴールポストに当たり難を逃れる。そのまま逃げ切り２－０で優勝を飾った。

試合後、主将の小澤南斗選手（法律２）は「３年生にとって最後の大会だったので、顔を立てることができてよかった」と語った。（鈴木恭輔）

ドリブルで攻め込む本学選手

コーヒーを知って、飲んで、考える

11月に入り、コーヒーを自然と欲するようになるのではないだろうか。コーヒーには深い歴史があり、時代を経て日本人にも愛されるようになった。多種多様な飲み方がある一方で、コーヒー栽培が問題を抱えていることはあまり知られていない。今号ではコーヒーの魅力を再発見するとともにコーヒーの将来を考える。

幸せ運ぶよ コーヒー文化

日常生活をより豊かにするために嗜好品（しこうひん）の存在は欠かせない。中でも、お酒やたばこと並ぶ嗜好品の代表格であるコーヒーは、幅広い世代に好まれている。

コーヒーが現在のように広く飲まれるようになるまでには歴史がある。コーヒーを飲む習慣の始まりは、宗教上の理由でお酒を飲めないイスラム教徒が、15世紀頃に代替品としてたしなんでいたことだという。幕末期に日本に伝来したが、幕府の人が初めてコーヒーを飲んだ際に「焦げ臭く味わうに耐えない」と書き記したという逸話が残る。当時の日本人は慣れない香りや苦味を苦手とする人が多かったと推察される。しかし開国を機に外国文化に憧れる日本人が増え、コーヒーを飲む機会が増加した。1960年代にはコーヒー豆の輸入が全面自由化し、多数の国内メーカーがインスタントコーヒーの製造を開始したことで、より一般的な嗜好品として広まった。

取材を受ける小林教授

今回、コーヒーと私たちの日常とのつながりについて、嗜好品を研究している文学部の小林盾教授に話を伺った。コーヒーは飲み過ぎによる人体への影響が少なく、適量を心掛ければ付き合いやすい。コーヒー特有の香ばしさや含まれるカフェインは、眠気を覚ます他、気分を変えるのに効果的だ。さらに、誰かとコーヒーを飲むことで交流が広がったり、会話のきっかけになったりする。

また小林教授は、欧州の人々にとって、コーヒーは日本人とお茶の関係に近いと話す。欧州の人々は、日本人よりも日常的にコーヒーを摂取する傾向がある。実際に、日本人が１年間で摂取するコーヒーの量は、欧州平均よりも少ないという統計が出ており、海外の習慣は日本と一線を画している。

小林教授は、嗜好品は生活に豊かさを与え自身を後押しする「幸せのエンジン」だと語る。嗜好品は生活必需品ではないが、たしなむことで幸福感を味わえる。そういった嗜好品の一つであるコーヒーは、長い歴史を経て現在も私達の生活と深い関係を持ち、その楽しみ方も無限大だ。コーヒーを通してささやかな幸せを味わってみるのも良いだろう。（高橋豪）

見つけよう 自分好みのコーヒー

コーヒー豆にたくさんの種類があるようにコーヒーの焙煎や抽出の方法もさまざまだ。こうした違いによって味や香りが変化し、飲む人を楽しませる。

焙煎とは、コーヒー豆を煎ることで成分が化学変化を起こし、味や香りの違いを生む工程だ。「コーヒーロースト丸高　武蔵境店」では、店主の丸高実さんが購入者の好みに合わせてその場で焙煎し、鮮度の良い状態で提供している。同店の焙煎は大きく分けて、浅煎り、中煎り、深煎りの３段階があり、深いほどビターな味わいになる。短時間で少量のコーヒー豆を焙煎し、風味を強くするのが同店の特徴だ。

味わいは抽出温度によっても変化する。コーヒーを作る際のお湯の温度は90度が基本とされているものの、低温で抽出すると酸味は出るが優しくやわらかい口当たりに。一方、高温で抽出すると苦さと渋みが出る。丸高さんは「味の可能性は無限であり、好みによるため、自分がおいしいと思ったものを選んでほしい」と話す。

コーヒーを淹れる丸高さん

コーヒーの味が苦手な人は、抽出前に蒸らさず素早く淹れることで、さっぱりとした風味と特有の香りを楽しむことができる。加えて、苦味が気になる場合はミルクで割って飲むと良いそうだ。お気に入りのコーヒーの淹れ方を探し、気分転換をしたい時に飲んでみてはいかがだろうか。（星野佑奈）

栽培地域減少 2050年問題を考える

近年、多くの人がコーヒーに慣れ親しんでいる。しかし近い将来、地球温暖化によりコーヒー豆の生産量が減少し、コーヒーを飲める日常は当たり前ではなくなるかもしれない。

コーヒー豆は、コーヒーベルトと呼ばれる赤道付近の地域で栽培される。特にブルーマウンテンをはじめとした高品質なアラビカ種は、世界で流通しているコーヒー豆の６、７割を占める重要な品種だ。しかしアラビカ種は気温の低い高地で栽培されるため、地球温暖化に伴い栽培地域が減少する可能性が高い。昨今、この問題は2050年までにコーヒーが希少になる「コーヒーの2050年問題」として危惧されている。

コーヒー豆の栽培が難しくなることは生産者の経済状況にも被害を及ぼす。もともとコーヒー豆は天候や病害によって生産量が変動しやすく、市場での取引価格が不安定な作物だ。そのため生産者は収入が安定せず、貧困に陥りやすい。そこに「コーヒーの2050年問題」が追い打ちをかければ、さらなる貧困問題が引き起こされるだろう。

全日本コーヒー協会の大山誠一郎さんは、現在のコーヒー業界について「持続可能なコーヒー産業へとかじを切らなければならなくなっている」と語った。私たちにも企業の取り組みを調べる、フェアトレードの商品に興味を持つなど、コーヒーの将来のためにできることはある。まずは、コーヒーのその一滴にも生産者がいることを改めて思い出してほしい。（秋田彩夏）

編集後記

私はコーヒーを愛飲している。最近はコンビニ等で販売中のものは一通り飲み、新商品の発売を心待ちにしている。だがそんなコーヒーについて深く考えたことはあっただろうか。

昔のコーヒーはお酒の代わりとして限られた人にしか飲まれていなかった。しかし時代と共にその役割は変化し、多くの人に幸せを与える身近な存在となった。コーヒーの種類は多岐にわたり、コーヒー豆の育った環境や品種によって味が変わる。焙煎や抽出の方法を工夫すれば、自分に合うオリジナルの一杯を創れることも魅力だ。しかし、地球温暖化によって近い将来コーヒーを手軽に飲めなくなってしまう可能性もあるという。この先の未来でも日常的に楽しめるようにするには、一人一人が考えて行動することが必要だ。

現在では、専門店等でなくても気軽にコーヒーを手に取れる。同じブラックや微糖として売られていても販売元で味や香りが異なる。コーヒーについて普段と違う視点から考えると、奥が深い世界が見えてきた。（永松由衣）

成蹊大学新聞
発行人　遠藤　可稀
編集人　外山　隼也
制作人　夏目　大
秋田　彩夏
万浪　耀
デスク　小川　紀寧
中西　幸太
川船　英紀
永松　由衣
○広告掲載のご依頼は seikeipress@gmail.com までご連絡ください。

SATORI GROUP

Technology
Solution
Global
手を伸ばすと、指先に“未来”が触れた……。
挑戦する楽しさを、
やり遂げる喜びを分かち合いたい。
FORESIGHT
もっと先へ、もっと未来へ
会社概要
・設立　1947年
・資本金　26億1100万円
・売上高（単体）445億9300万円
（連結）1258億5000万円
・株式上場　東京証券取引所プライム市場
・事業内容　電子部品・電子機器の販売及び、これらに付帯する事業
・子会社
佐鳥パイニックス
スター・エレクトロニクス
佐鳥SPテクノロジ
台湾佐鳥
香港佐鳥
佐鳥貿易（上海）
佐鳥貿易（深圳）
韓国佐鳥
シンガポール佐鳥
タイ佐鳥
佐鳥Ｅ－テクノロジー
佐鳥ドイツ
佐鳥電機株式会社
http://www.satori.co.jp/
代表取締役社長執行役員　佐鳥浩之（経　済　1989年卒）